

野 営 基 準

昭 和 4 1 年

ボーイスカウト日本連盟

目 次

I 出発までに

1. 野営のための訓練	1
2. スカウトの野営のたてまえ	2
3. 野営と成人指導者	2
4. 野営地	2
5. 家庭その他関係者への通報（第1回）	3
6. 備品、携行品の調達、整備	4
7. 運輸、交通	6
8. 献立	6
9. プログラム	6
10. 決定通知	8

II 野営地にて

1. 配置	8
2. 便所、手洗い所	8
3. 炊事場、食堂	9
4. 食事	12
5. 倉庫テント	12
6. 健康と衛生	12
7. 日課、作業	13
8. まわりの人達	15

III 撤 営

1. 撤収の前日	15
2. 当 日	16
3. 最後に	16

IV 帰ってから

1. ノート	16
2. 記 録	16
3. 礼 状	16
4. 野営具の整理、補修、格納	16
5. 班長会議（反省会）	16

野 営 基 準

スカウト野営の基本は少年隊の夏季野営（長期、固定）である。室内集会、ハイキングでの各種の作業、1泊野営の生活等はすべて夏季野営を目ざす準備訓練であり、年長隊の移動野営、勤労野営、ローバースカウトの遍歴等はこの基本を充分身につけた後さらに高く、広く進展させ応用したものといえる。

この小冊子は少年隊夏季野営に関し、必ず守らねばならない事柄を要約したもので、そのすべてを詳しく述べたものではない。野営に参画する指導者はもとより、班長諸君も自分の役目を果たすために、この野営基準をよく研究し、体験を重ねて、状況に適した応用と補足によって、さらに一そう自分達の野営を充実に向上させるよう心がけていただきたい。

I 出 発 ま で に

1. 野営のための訓練

(1) 指 導 者

長期野営の責任者となるには野営訓練を受け、相当な経験をもっていなければならない。地区、県連、日連が行なう訓練に進んで参加して研究につとめるとともに、経験豊かな指導者の主宰する野営に参加して実習する。あるいは、先輩指導者の経験談を聞いたり、参考書なども読み、さらにスカウト達とともに1泊野営の体験を重ねながら、進歩をはかる等いろいろな方法で自分の能力を高めて行くのは指導者の義務といえる。

(2) スカウト

スカウトに対する野営のための訓練は入隊したその日から始まる。

夏季野営に参加するスカウトは少なくとも次の点について、出発までに訓練を修了していなければならない。

① 一番手初めは、初級および2級課目の健康安全、救急法、結索法は時間の許す限り繰り返し練習し、程度を高め熟達させる。

② 次のことは冬の間に、隊集会やハイキングで、ゲーム、競技、実習作業として訓練プログラムに組み入れる。

○炊事と食器洗い ○寝床作り（グラウンドシート、敷わら、毛布などの正しい使い方）○テントの張り方、た・み方 ○代表的な野営工作 ○個人携行品、その使用法 ○リュックサックのつめ方、背おい方 ○荷物の荷作り法

③ 1泊野営で次の実習を重ねる。

○テント内および寝具の乾燥

○身体の清潔、洗身

- ねまきの必要性
- ゴミ、汚水の処置
- 便所の作り方と使い方

(3) 訓練の方法と順序

①②③はつまり予備訓練である。その進度にとらわれ過ぎないようにする。一と通りできたら実際の野営、1泊野営をできるだけ何回も行なって体験を積むようにする。どんなに少なくとも、隊長などと班長(次長を含むこともある)全員で行なう訓練野営1回、スカウト全部が参加する隊一泊野営(特別の条件が揃えば班野営)2回、できれば3回を夏季野営の前に実施する。もしこれだけの訓練を経験しないスカウト達が多数夏季野営に参加すれば、おそらく夏季野営にふさわしいプログラムは実施不能となり、テントを張っただけのキャンプ村になってしまう。

2. スカウト野営のたてまえ

スカウト野営は単なるレクリエーション、楽しい休日以上のものである。B-P卿次のことばを忘れないようにしよう。

“スカウト野営は隊長にとって、真のスカウティングを実際にスカウト達に行なわせる絶好の機会である。スカウトの訓練という立場からすると、大規模の野営はよろしくない。理想的なスカウト野営は万事が、終始、班制のもとに運営され、各班は別箇の単位であり、それぞれの領域をもち、班毎に炊事をし、他に頼らない”。

3. 野営と成人指導者

スカウト野営、特に長期野営では同行の成人指導者は隊長1人だけということとは許されない。副長、団委員、ローバースカウト、隊の先輩、父兄等の中から協力者を得て、少なくとも1名、標準としては2名以上の成人を隊長以外に必要とする。この場合、隊長は野営全体の管理と訓練や作業の実施に専念し、他の成人指導者は次のような責務を分担する。

倉庫係 食料および備品、用具の調達、保管、配給、倉庫テントの管理。

保健係 野営地全般の衛生の保持、危険防止。特に便所、炊事場、水汲み場洗濯場などの管理および水泳の安全確保。

なお、隊長が救急法の熟達者でないときは適任の成人が1人加わらなければならない。

4. 野 営 地

遠くへ出かけるほど、費用は高くなるが、夏季野営はできるだけ、平常の街や近郊とは違った大自然の中で行ないたい。著名な観光地や海水浴場は避ける。

野営地の条件は次のことを基本とする。

- (1) 水：飲料用、洗浄用とも充分の量が得られること。水道でない限り水質を

検査する。流水では上流の環境や農薬の混入に注意し、また下流でその流水を利用する人達への配慮を忘れないこと。

- (2) 土地：排水が良いこと。
- (3) 環境：陽当りの良いこと。強風が直接当たらないことが望ましい。ゲームや作業するのに適した広場や、できれば水浴場があること。
- (4) 燃料：適当なき木が得られること（買うにしても、採集するにしても）。工作材料としても必要である。
- (5) 食料：なるべく新鮮なものが現地の近くで調達できることが望しい。
- (6) 有害動植物：蚊、ぶよ、ハエなどが多くいないところ、害虫、まむしなどのいないところ。
- (7) 交通：物資の輸送になるべく便利のよいところ。

野営予定地は、必ず事前に現地視察を行なう。自分の目で確かめる。遠くはなれた所にて、人づての情報から適否を判断してはならない。できれば班長会議のメンバーとともにそこで1泊野営を試みるのが最も良い。

現地視察では次のことに注意する。

- (1) 最悪の天候のときの野営地を予想して、すべての条件の適否を決める。
 - (2) 土地の役場の係の人、近くの農家の人等にあつて話を聞く。伝染病、害虫（蚊、ぶよ、まむしなど）の有無、運搬や食料調達の便、時によってはそれらの予約について確かめる。自分達と同じ時に、他の人達が同じ土地を使うことになっていないことも確かめる。
 - (3) 商店、医院、郵便局、電報電話の便、警察署、消防署、役場等の所在を確かめ、警察署、消防署には事前に連絡をしておく。
 - (4) できればその土地か、近くに住んでいるスカウト指導者に予定地について意見を聞く。土地の状況は、その土地の人が一番よく知っている。
 - (5) 見取図を作る。写真も利用できる。
 - (6) 国土地理院発行の地形図を参照して、ワイドゲーム、ハイキングの可能性を調べる。土地には必ず所有者がある。事前に使用許可を得ることを忘れてはならない。またその土地の県連盟には所属の地区、県連盟を通して連絡しておくことは、何らかの助力を求める、求めないにかかわらず必要である。
5. 家庭その他関係者への通報（第1回）

野営地が決ったらすぐに次のことをスカウトの家庭、学校および自分の地区委員会へ通報する。

○場所 ○日程 ○スカウトの携行品 ○費用（はっきりした金額をこの時に決められない場合概算額で少し余裕をもたせ、後で精算してかえすことにする。足りなくなつて、追加徴収することは喜ばれない。団会議を経て団委員会とよく相談することが必要）○指導責任者および同行指導者。

家庭への通知には、スカウトの参加申込み、健康状態の申告、両親の参加承認の用紙を同封する。学校によっては、学校長の許可を得なければならないところもあるから、その場合は許可願を出すこと。

6. 備品、携行品の調達、整備

いつから始めるのがよいか。^{あとしまつ}物の後始末とは次に使う時のための用意である。一そなえよつねに一夏の野営がすめば、すぐ一切の備品、テントからしゃもじにいたるまで点検し手入れする。修理の必要なもの、補充すべきものを別にして整頓、格納する。追加、補充、新調と修理はおそくとも冬の間(2月末まで)にやっておく。野外活動が比較的少なくなる冬はこれらの作業に最も適している。以上のことは隊備品だけではなく個人の野営用具についても同じである。食器袋、糸、針ケース、できれば寝袋、一人用テントの製作は冬のよい作業となる。

テントの調達は一番お金がかかる。始めのうちは他から借りて間に合わせるのもよいが、次第に自分のテントを調達して、最後には各班に1組ずつ専用のテント(そして炊事具、工具、一切の野営具)が揃うよう、団委員会も隊の全員も努力する。

指導者はスカウト達と異なった時間割で行動しなければならないことがある。従って、スカウト達と同じテントに起居することはお互いに迷惑となる。どんな型、大きさでもよいから、とにかく別のテントを用いるべきである。

(1) スカウト携行品

- | | |
|--|-----------------------------------|
| ○制服(正しく記章をつけて) | ○はき替え(運動靴、ぞうり等) |
| ○着替え(下着、靴下) | ○洗面具(歯みがき、歯ブラシ、石けん、くし、タオル2本) |
| ○作業衣(上衣、ズボン) | ○ハンカチ、はな紙(少し多い目に) |
| ○雨具(レインコートまたはポンチョ) | ○食器(皿、わん、コップ、スプーン、フォーク、箸、ふきん) |
| ○防寒衣(スエーター、ジャンパー) | ○靴手入れ具 |
| ○毛布 | ○その他特に指示されたもの(手旗、地図、磁石、水筒) |
| ○ねまき | ○其他各自任意のもの(持薬、楽器、カメラ、採集用具、参考書、時計) |
| ○水泳パンツ | ○歌集、スカウト手帳、ポケットブック。 |
| ○修理具(糸、針、ボタン等) | |
| ○作業具(軍手、ナイフ、ロープ、小シャベル、懐中電燈またはランタン、ろうそく、マッチ、笛、筆記具1人用救急用品) | |

以上のすべてをリュックサック、ハバサックなどに、小袋に分類して詰める。どんな小さなものにも名前を書き入れておく。

(2) 指導者携行品(スカウト携行品のほかに)

- ランタンとろうそく
 - 強力な携帯電燈、予備電池
 - 野営参加承認証（健康記録）
 - 時計（できれば目覚時計）
 - 参考書（歌集、ゲーム集、星座図等）
 - 通信用品（用箋、封筒、切手、住所録）
- (3) テント（杭、ロープ、木槌等付属品とも）
- 指導者用（人数分）
 - 班用（各班ごとに）
 - 休養テント（1）
 - 倉庫テント（1）
 - マーキー（1）
 - フライシート（各テントに付属するものとは別に、本部と各班にひとつずつ）
- (4) 工具（各班ごとに、たゞし野営地の状況によっては一部の工具は隊に備えつけ共用とすることができる。）と材料
- ショベル
 - 斧または鉋
 - かま（あまく薄刃でないもの）
 - 砥石（白砥、金剛砥）
 - 金づち
 - 釘
 - くわ
 - 鋸（山鋸と竹鋸）
 - かけ灸
 - 油引
 - 針金（10番と18番位）
 - ペンチ
 - 補充用ロープ
 - テント補修具
- (5) 炊事具（本部用と各班に1組ずつ）
- 深なべ(2)
 - やかん(1)
 - フライパン(1)
 - 時として飯盒（1～2）
 - バケツ、できれば蓋付(2)
 - 水ひしゃく（1～2）
 - 汁しゃく(1)
 - 飯しゃもじ(1)
 - 庖丁(1)
 - まな板(1)
 - ボール（大小各1）、
 - たわし(1)
 - ざる(1)
 - 洗剤（若干）
 - ポリエチレン・シート、
 - 袋（若干）
 - 缶切り、栓ぬき
 - 防水マッパ入れ
- (6) 救急箱（個人用のほかに隊用として）
- 箱の内側に内容の一覧表とその使い方の要点を書いたものをはりつける。
- ガーゼ、脱脂綿、包帯は何個かに小分けしてポリエチレン袋に入れ、さらに大袋にまとめる。小さな携帯電燈を一番取り出しやすい所に入れておく。
- ガーゼ（大、中、小に切りそろえ、滅菌したもの）、○脱脂綿、○包帯、
 - 三角布、○絆創膏、○油紙、○リント布、○リパノール液、○マーキュクローム、○チンク油、○ピンセット、○はさみ、綿棒、○体温計、○創傷用軟膏、○消毒用アルコール、○アンモニア水、○緩下剤、○風邪薬、○鎮痛剤
 - 胃腸薬
- (7) 衛生薬品、手洗い用消毒薬、便所消毒薬、防虫剤
- (8) 教 材
- 掲示板
 - 携帯黑板
 - チョーク
 - 黑板ふき
 - 石膏
 - カーボン紙

○画用紙 ○マジックインク ○更半紙 ○模造紙 ○方眼紙 ○セロテープ
○紙色テープ ○ロープ ○滑車 ○麻ひも ○麻糸と帆布針 ○地図
○磁石 ○巻尺 ○分度器 ○コムパス ○荷札 ○テニスボール ○ドッジボール
○空気ポンプ ○日誌、報告書用紙 ○国旗 ○隊旗 ○班旗

7. 運輸、交通

おそくとも、出発1か月前に、鉄道、バス等について、コース、時間、運賃を調査して、予約、割引の交渉をすませる。学割を早目に入手しておくこと。下車地点と野営地間の距離によっては、この間の荷物運搬のため、トラック、荷車等を手配しておかねばならない。

現地調査の結果をよく利用する。大きな荷物は早くから、相当な時間の余裕を見こんで、鉄道便、トラック便で送っておくとよい。荷造りはしっかり、強く、こわれ物や濡れてはならないものは特に慎重に処置する。

一番大切なのは間際まで放っておいて慌てることのないよう、すべて早めに手配をすませることである。

8. 献立

野営全期間の食事について、献立と所要食料の量目表は事前に決定しておく。スカウト達にとって、冬の間の訓練が正しく、みっちり行なわれていたならば、1週間分の献立を作るのは楽な作業である。

献立の変化 あきぬよう、また栄養的に偏りや不足がないよう材料に変化をもたせることはもちろん必要であるが、調理法も変化に富んだものとしたい。毎日朝夕、ごった煮ばかりでは食欲も減る。焼き物、いため物、工夫すればローストもできる。たとえば缶詰を材料に使っても、調理の仕方と工夫によっては、生のものを使うよりも、美味で安上りの料理ができ上る。

上級のスカウトには、この野営中に、自分の食事を“器具なし”で作って見る機会を与えてやる。

献立は融通がきくよう組んでおかねばならない。非常な悪天候、現地調査の手違い、プログラムの変更等の場合、これに即応して献立を変更しなければならない。

非常の時や、急を要する時はインスタント食品も役に立つ。しかしなるべく、時間をかけた手料理が好ましいことは平素の家庭生活と同じである。特にスカウトの野営では、食べるだけではなく、作ることに大きな意義があることを忘れてはならない。

9. プログラム

一番重要なことは、“野営全期間の毎日について作業活動がすっきり、出発前に計画されている”ことである。ただし、適当な“自由時間”を設けて自発

活動を奨励することも忘れてはならない。

プログラムは、全面的にスカウト達の実習と進歩、(特に野外でないとできないような考查課題)の機会となるよう組立てるべきで、この野営に参加したら、すべての参加者が少なくとも1歩(1課題、1進級、1技能章)進歩することをねらいとする。野営地から、1級考查のためのハイキングに出かけるのはスカウトにとって誠に好都合といえる。また、平素は隊でやれないこと(水泳、大斧の使い方、開拓作業等)がうまく選ばれた野営地なら存分に楽しめる。

スカウト達はスカウティングをやりたがっている。のらくら、ぶらぶらを欲しているのではない。野営全体を真のスカウト活動で充満させよう。

各班が丸一日、班独自のプランで活動できる日もつくる。またスカウトが単独、あるいは仲間数人と一しょに、自分の課題をもって、探索に出かけるのを許すこともある。

雨の日はどうするか。代替えのプログラムを常に考えておく。

さて、プログラムができたなら、そのために必要な用具のリストを作り、調達する。そして必ず野営地までもって行く。

夏 期 野 営 標 準 日 課 表

6.00	起床、洗面 朝食、後片付け、 清掃、整頓、乾燥
8.00	点検、講議、朝礼=国旗掲揚
8.15	午前の作業
11.45	作業終了 昼食、静肅時間(自由時間)
1.30	午後の作業
3.30	休憩(おやつ)
5.00	作業終了 国旗降納 夕食、班作業
7.30	営 火
8.30	営火終了
9.00	就 寝
9.30	消 燈

1日ハイク、1泊ハイク、ワイドゲーム、夜間作業等が行なわれる時はこの日課表と異った時間割となる。夜間作業のため就寝が遅くなった翌朝は起床時

間を適宜おそくするなどの配慮も必要である。

消燈時刻以後起床時刻までの静粛はきびしく守らせる。

10. 決定通知

スカウトの父兄および関係先に、出発2週間前に次のことを通知する。

- 野営地の連絡宛名 ○集合地、出発時刻 ○携行食料 ○帰着予定日時
- 父兄訪問日 ○その他の諸注意

II 野営地にて

1. 配置

配置計画は現地調査の結果から既に決っているが、その後の変化もあるから、現地についたらすぐ、短時間で、隊長と班長全部が野営場内をまわって実際の配置を打合せ決定する。配置を決める上で、気をつけねばならないことは下記の通りである。

- ① 班は独立した別々のサイトをもつ。近づき過ぎないように、できればお互いに見えない場所がよい。
 - ② 指導者のテント、掲示板、国旗掲揚柱は全体のほぼ中央にする。
 - ③ 各班は自分のテントの近くに班毎に炊事場をもつ、4 m平方くらいは必要。
 - ④ 便所はすべての施設の風下に作る。どの班からもなるべく同じ位の距離の所に、遠くても100 m以内とする。夜間は燈火標識をつけるとよい。
 - ⑤ 倉庫テント、休養テントは指導者テントの近くの日かげに設ける。
 - ⑥ ゴミ焼場は風下につくる。
 - ⑦ 水汲み場はなるべく近くに。
- 設営の分担は次の通りにする。

- ① 各班はそれぞれ自分達のテントを、指導者は自分達のテントと休養テントをはる。
- ② 各班は次の作業を分担する。
 - a 便所を掘り、目かくしを設ける。
 - b 隊用ゴミ穴と焼却がまを作る。
 - c 水汲み場、洗い場の整備、国旗掲揚柱をたてる。
 - d 倉庫テントをたて、担当指導者(倉庫係)の指図によって品物をテント内に収める。
- ③ 指導者達は各班の仕事を見てまわり、助言や指導を与える。
- ④ ②の仕事が全部終わったら、班全員で荷物をテントに入れて整理し、薪集め、班の炊事場作りにとりかゝる。

2. 便所、手洗い所

衛生的で使い易い便所を設けるのは野営で最も大切なことである。衛生上最

もよいのは巾の狭い溝を掘り、使用するたびに、掘りあげた土で充分覆ってしまふ方法である。目かくしは古シート等で作り、下部は30cm位地面から離し、全体の高さを1.8m位とする。落し紙は蓋のついた箱か缶に入れて溝の近くに、掘りあげた土の所には小シャベルをおく。手洗い水、タオルは、かこいの外側に備えつける。溝の大きさは、

長さ	60cm
巾	25cm
深さ	60cm

この溝1つで、8人のスカウトが4日間使える。これ以上になると埋め戻して、新しいのを作る。この型の便所はうまく使えば、臭いもしない。臭いがするのは使い方がわるく、用をたした後を充分に土で覆っておかないからである。小便所は別に作る。小さな穴を掘り、小石を敷きならべて溝で流し出すようにするか30cm×60cm×深さ60cmの穴を堀り、穴の中に杉葉などを押し込んでおく、便所の夜間照明、燈火標識を工夫するとよい。便所の位置は水源に影響を及ぼさないようよく考えて決めなければならない。ときどき消毒薬を散布する。

手洗い所の近くの地面は泥沼にならないよう、排水を良くする。捨てられた水は、足許に溜らず、離れた所にある下水溜へ流れ去るように工夫する。手洗い所の水はいつも充分あるように、また不潔にならないように注意する。

3. 炊事場、食堂

○かまど 大きすぎても、小さすぎても能率がわるい。穴を掘らねば火が燃えないということはない。火床が低いと、苦しい姿勢になる。高すぎると危険である。なべの底が膝の高さ位にくるのが一番よい。火の用心、立木を傷めぬ配慮も大切。雨が火床に降りこまないよう雨覆いの工夫をする。

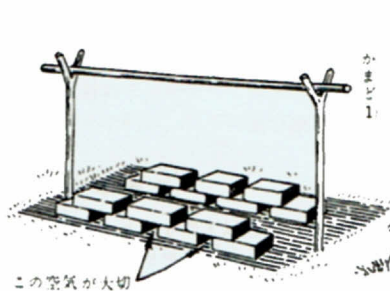
○薪おきば たきつけ、細か枝、太い丸太を分類して、積み重ねる。崩れて、散らばらないよう長い杭を立てて整理する、かまどと同様に雨覆いが必要である。

木炭は便利な燃料である。ただ、どこでも手に入るとは限らないし、高価である。また、七輪かこれに替る何かがある。

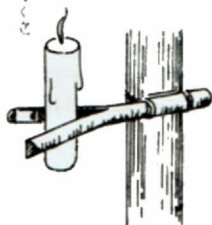
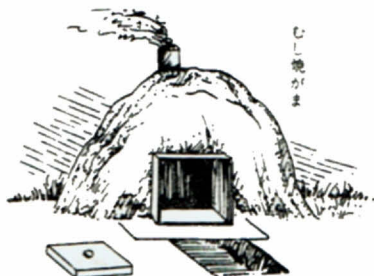
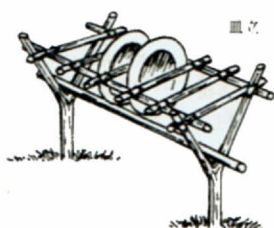
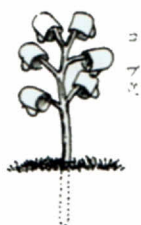
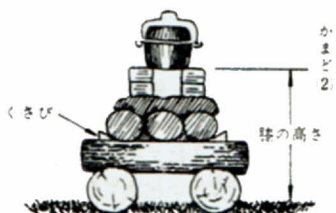
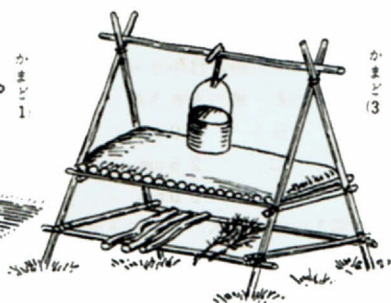
大切な注意 換気ができるよう、いいかえれば内で火をたいてもよいよう始めから考えて作ってあるテント以外の、普通のテント内では夏冬にかかわらず、木炭をたいてはならない。ガス中毒の危険がある。

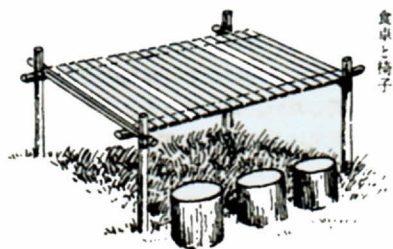
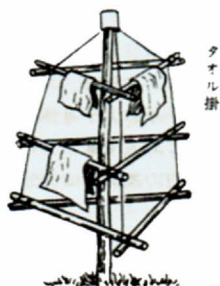
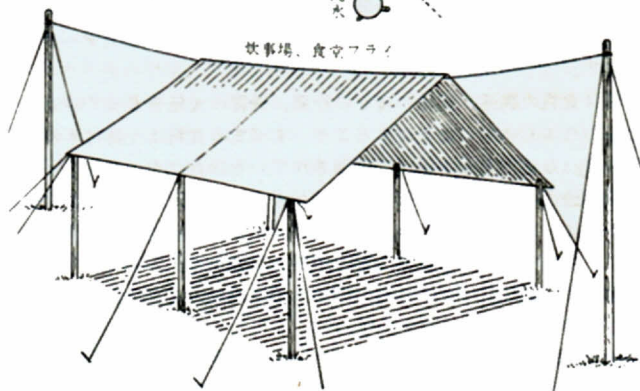
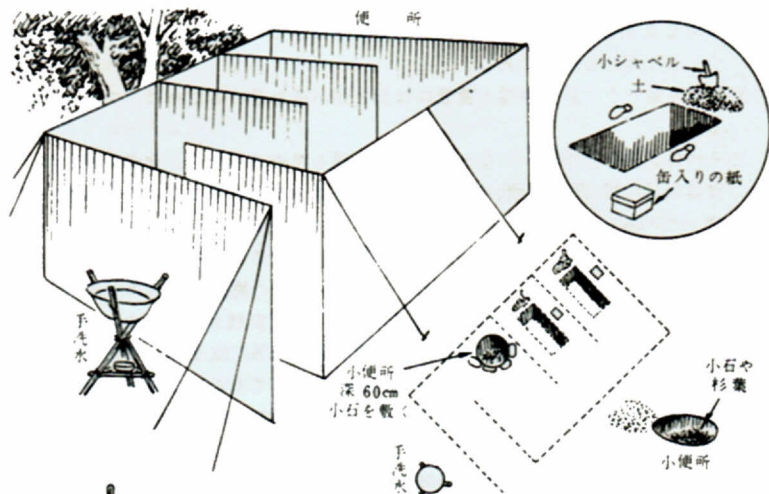
○汚水穴 炊具や食器を洗った水は必ず汚水穴に捨てる。大きなバケツ位の穴を掘り蓋をつける。蓋から10cm位下に、ごみ受けをつける。ごみ受けは竹か木の枝で作った骨組に草などをならべ敷いたもので、上から流しこんだ汚水の中の脂肪分や野菜屑を受けとめ、水だけを下へ落す役目をする。ごみ受けは日に2度位新しいものと取かえる。古いのは完全に燃やしてしまう。

野営工作物の一例



この空気が大切





○ごみ焼き どうしても出てくる野菜屑のような厨芥も焼き捨てるのが一番衛生的である。乾燥すればジャガ芋の皮もエンドウのさやもきれいに燃え切ってしまうものである。缶詰の空缶は燃えはしないがやはり焼いてから平につぶして埋めるものである。

○フライシート 炊事場と食堂には雨と強い陽を避けるために、フライをはる。

○その外必要な工作物 なべ、やかんを吊るための小道具、食卓、調理台、食器炊具の棚、手洗い台、タオル掛け、ほうき、食料保管の工夫、その他。

4. 食 事

スカウトの野営は“不便をしのぶ”訓練や、豚のような生活をするために行なうものではない。時間をキッチンと守ること、食前の感謝、食事の作法は、指導者が手本を示し、当然のこととしてスカウト達に実践させる。定められた時間の少し前に、班の全員は食卓につく。食事中、勝手に盛りつけのため立ったり坐ったりせずにすむよう輪番の給仕当番に世話してもらう。隊長、副長等は各班を順次訪問して、スカウト達と一しょに食事するのがよい。

5. 倉庫・テント

食料の各班への配給は一定の時間に行なう。そうしないと、たゞでさえ忙しい倉庫係は皆の召使いになってしまい、倉庫は無料スーパー・マーケットになってしまう。

倉庫係は食料の調達、配給のほかには貯蔵、保管の大任をもっている。テント内に1匹のハエもいないようにすること、すべての食料は、蓋付きの箱または缶に入っているか、完全な覆いで保護されていなければならないし、これらの容器は直接地面の上には絶対に置いてはならない。肉類、牛乳のようないたみやすいものは、冷たい風通しのよい所に（あるいは、その条件を作り出して）、保管する。以上すべて、倉庫係の責任である。ポリエチレンやビニールの袋、シートは何かと役に立つ。また通気性のある寒冷紗のような布も用意したい。

6. 健康と衛生

よく考えて作った、ごみ焼がま、汚水穴および便所を正しい方法で使うことと、すみずみまで清潔な野営地が衛生を確保し、健康を増進させる。

○ ごみ、屑はすべて焼き捨てる。燃えないものだけを埋める。

○ 身体を清潔にする習慣も指導者の示す手本が大きい役目をもっている。

隊長達が毎日、身体を洗ったり、ふいたりしているのを見れば、スカウトもそれにならうようになる。毎朝の点検、講評で歯、手足および身体全般の清潔を強調したい。健康状況表をつくり、点検のときに記入するとよい。

○新鮮な空気は昼も夜も必要である。就寝後もテント内の換気には充分注意しなければならない。

○ 陽光は健康によいが馴れぬ間に当りすぎると害がある。日中は首筋と肩

は直射日光にさらさないよう何かで覆っておく。ストッキングはぬいだ方がよいが、はだしは危険なので止めさせる。砂地や草地では固い靴でなくとも、サンダルかぞうりをはかせる。

- スカウティング・フォア・ボーイズの第18, 19章に基いて、数回の講話を与えるのもよい。
- 新鮮な果物や野菜をできるだけ多くとる。
- 便秘のようなちょっとしたことは野営地で処置してもよいが、少しでも疑わしい病気は医師に見せるべきで、冒険を試みてはならない。けがは小さなものでも、必ず報告させる。

7. 日課、作業

出発までに充分検討の上、プログラムをしっかりと組立ててあれば、全野営地に活発なスカウト作業を展開するのはやさしいことである。

- 班長会議は毎日、定時に開き予定を確認し、実施方法、作業分担を打合わせる。隊の運営がすべて班長達で行なわれることは平常と同じであるが、余りにたびたびちょっとしたことを伝えるのにも“班長集れ”の笛を無計画に吹くのは指導者の側の準備不足といえる。班長には、隊の仕事とともに班の運営という仕事があるのを忘れぬようしたい。
- スカウト達の不平、不満の種を早く見つけて、これが野営全体の空気に影響する前に処理するよう努める。
- 水泳 水泳における注意はスカウト、指導者とも厳格に守らなければならない。許可を受けずに泳いだり水泳規則を守らぬスカウトは帰宅を命じられることになることを、スカウト達にも、父兄にも充分知らせておく。
 - ① 身体の調子がわるい者は参加させない。
 - ② 水泳に熟練し、溺者救助の心得がある大人が必ず付添う。
 - ③ 水泳区域を決める。初心者、熟練者用に分ける。区域外へは絶体に出ない。
 - ④ 各区域ごとに年長の監視者をおく。その手許に救難用具を備える。
 - ⑤ スカウトを能力別に組分けする。(泳げぬもの、初心者、熟練者)
 - ⑥ 2人の組(パティ)を作り、常にお互いに確認しあいながら行動させる。
 - ⑦ 全体の責任者を定めておく。
 - ⑧ 規則は他の作業の時よりもきびしくする。
 - ⑨ 付添い者、監視者、責任者はスカウト達と一しょに泳いだり、あそんだりしてはならない。

人命に関する要心はいくらしても、やり過ぎにはならない。

- 刃物 初級スカウトに斧、鉋を使わせない。

- 点検 班ごとに、正しく制服をつけ、野営地内のすべてのものを整頓して毎朝の点検を受ける。野営中は略装、略式がゆるされ、のびのびと自然の中で活動することができるが、点検の時は、すべて正式に厳格に取扱う。点検を始める5分前を信号で知らせるとよい。抜き打点検は行なわない。

点検は評価のためのものでアラ探しではない。野営の規律、安全、衛生を確保し、スカウトの進歩を上げます手がかかりとして行なうものである。

点検要点は次の通りである。日によって、また状況に応じて重点をかえる。

- ① 服装（清潔、着こなし）
 - ② 健康状態（歯、手足、爪、頭髮等の清潔、舌の色、睡眠、便通、疲労）
 - ③ 持ちもの（危険物、不許可品、手入れのよし悪し、整理の仕方）
 - ④ 乾燥（手布、寝具、敷わら、シート、その他）
 - ⑤ テント（ランナーの調節、内部の乾燥、汚損の有無）
 - ⑥ かまど、薪おきば、流し穴、食器棚、調理台、食卓、フライシート、食料貯蔵庫（すべて清潔、衛生、整理、整頓、目的に適った工夫、進歩改善の努力）
 - ⑦ 工具（整理、整頓、手入れ、危険防止の措置）
 - ⑧ 便所、手洗い（清潔、使用法の適否）
 - ⑨ 野営地内全般の清掃、整頓
 - ⑩ 全体として、班内の分担と協働がうまく行なわれているかどうか。
- 夜の点検 通常、消灯後各班の野営地を指導者が見まわる。安全衛生上（特に水、火の始末、張り綱の具合、テント内の換気の配慮）不備な点があれば一応修正措置を施しておいて、後で講評の時に、あるいは班長会議で注意を与える、またその日1日でどれだけ改善、進歩があったかを見る。
- 講評 毎日の朝礼時に行なう。各班の生活状態とその進歩についての評価を発表する。欠点を指摘してそれを責めるのではない。良いことは賞め、わるい点は改善を促がし（時にはそのヒントを与える）工夫、改善、進歩、向上を上げますものとする。
- 日曜儀礼 常々必要なことであるが、特にこの時を神仏への感謝の念をさらに深め、スカウト精神を高める機会とする。自分の信仰に従って礼拝を希望するスカウトには、そのための時間と便宜を与えなければならない。全員が同一の宗教を信仰している時でない限り、皆が一しよに行なう日曜儀礼を特定の宗教、宗派の儀式によって行なってはならない。この場合は通常、おきての朗読、B-Pの言葉の朗読、隊長の講話、感謝の黙禱などを行なう。
- 営火 訓練プログラムの大切な部分である。楽しく、面白く、皆の親密さを増すものでなくてはならないが、馬鹿さわぎだけのものではない。歌、劇、おどり、ゲーム、話が総合された大きな夜話ということができる。窮極

には自然を思い神に至る心を養う夜話である。

① 隊の営火としては1時間が充分な時間である。

② 営火には型はないが規律はある。

8. まわりの人達

スカウト野営がまわりの人達に与える印象——良い時もあるし悪い時もある——を指導者は考慮に入れておかねばならない。列車やバスの中、停車場その他の公共の場所、通過する町々での規律正しい行動はスカウト仲間の評判を良くするが、だらしない振舞いや人に迷惑をかける行為は運動全体に害を及ぼすことになる。

野営地の外ではスカウトは常に正しく制服を着用していなければならない。ローバースカウトも指導者ももちろん同じことである。

ひとに迷惑をかけそうなこと、抗議の種になりそうなことは避ける。他人の所有物は大切にする。自然を荒らさない。

野営をとりまく人達が、今後このスカウトがきても歓迎してくれるようにスカウティングについて良い印象を残して行くのが君達のつとめである。

野営地の近くにスカウト隊があれば、ぜひ連絡をとって招待し合同営火を催すことにしたい。昼間ならいろんなゲームも一しょに楽しむことができる。

III 撤 営

1. 撤収の前日

- 支払いを全部すませる。借りた物品で用済みのものは返す。
- 翌日の交通、輸送の予約をもう一度確める。
- ゴミを焼き捨てる。
- 便所、ゴミ穴等は1つだけ残して埋め戻す。
- 用済みの用具、教材を荷造りする。
- 炊事具、食器も最小限度を残して、洗い、荷造りする。
- 班長会議で明日の撤営の手順と各班の分担をよく打合せしておく。

2. 当 日

- テントは充分乾燥するまで倒さない。雨が降りそうだったら、濡れない先にな、いでしまう。
- 撤去、手入れ、荷造り等の作業単位は次のようなことになる。打合せに従って、各班で分担して片づける。
 - ① 炊事場、食堂のフライ
 - ② 炊具、食器
 - ③ 国旗掲揚柱、営火場
 - ④ 倉庫テント（残った食料品はどこかに贈るか、もって帰る。）

- ⑤ 休養テント、指導者用テント
- ⑥ 便所（埋めた跡にしるしを残す。）
- ⑦ 穴。溝をすべて埋める。まわりの土地をできるだけもとの様に整える。
- ⑧ 薪の余ったもの、工作物の分解したものは整理して束ねておく。
- ⑨ 各班のテント（濡れている時は特別の処置が必要である。そのまゝにしておるか、ひろげてどこか室内に乾かす場所を借り、後日撤収する。時間がかからない近くなら、濡れたまま持ちかえり、すぐひろげて乾かすのもよい。

⑩ 最後の掃除

一番よいのは、全員1列横隊になって野営地を端から端まで、ゴミを拾って進む方法である。――掃海法。指導者は自分の目でその結果を点検する。

⑪ 土地の持主に検分してもらう。

⑫ 世話になった近隣の人達で前日挨拶をすませていない所へ挨拶する。

3. 最後に

荷物の点検、個数しらべ、運搬分担を再確認して、帰途につく。
残すものは、感謝だけである。

IV 帰ってから

1. 指導者はノートを野営中はいつも携行し、改めるべきこと、記録に止めるべきことその他思いついたことすべてをその時、その場で書き止めておく。帰ってから、このノートを整理し、次の野営の参考とする。

2. 記 録

この野営の準備が始って以来のすべての往復文書、通知、献立、プログラム等を整理して綴りこむ。各班ごとにつけた日誌は写真や地図とともに隊の記録として保存する。後になる程、この記録は面白く見られるのである。

3. 礼 状

帰宅したらすぐ、世話になった方々に礼状を書く。

4. 野営具の整理・補修・格納

野営具を格納する前に破損した物のうち、自分達で修理できるものは修理し、テント、工具等の大破損したものは、それぞれ専門に修理する所に出し、乾燥不充分的ものは、ただちに乾燥し、刃物の刃こぼれ、鋸の目つぶれ等もよく調べ適当な処置をして、それぞれ湿気の無い蒸されない場所に保管しておく。

5. 班長会議（反省会）

帰宅直後の班集体会で、野営期間中に愉快だったこと、つらかったこと、失敗したこと、為になったこと等を話し合い、それを班長会議に持ち寄って研究し、次の野営をさらに完全なものにする足がかりとする。

以 上

この野営基準は

“Camping Standard”（英国連盟）と

“野営標準”（日本連盟スカウティング誌掲載）

をもととして編集したものである